

築後170年が経過した玄甲舎。

町では、敷地建物全体を史跡として位置付け文化財指定しました。

平成27年度より実地調査を行い、

修理方針の取りまとめや

実施設計を行うことで、修復事業に着手しました。

平成29年度には、建物の改修を終え

現在に「玄甲舎」が蘇りました。

今後は敷地全体の整備を進め、新しい地域文化振興の拠点施設として

広く親しまれるよう活用を考えています。



所在地 三重県度会郡玉城町佐田 151-22

文化財指定日 平成25年(2013年)1月9日

「玄甲舎」について

玉城町は、金森家から正式に譲り受けた後、平成25年に町の文化財として指定しました。

江戸時代後期の建築技術や文化を伝える玄甲舎は、歴史と文化の町・玉城町にふさわしい貴重な歴史的建築遺産です。みなさんに親しんでいただけるよう、修復・保存・活用に取り組んでいます。

お問合せ先

玉城町 教育委員会

〒519-0415

三重県度会郡玉城町田丸 114-1

TEL 0596-58-8212

FAX 0596-58-7588

http://kizuna.town.tamaki.mie.jp

homepage@town.tamaki.lg.jp

玉城町指定文化財

玄甲舎

金森得水 別邸(茶室)

佇まいに秘めた歴史

茶室と居宅、

2つの顔をもつ建築遺産

弘化4年(1847年)、田丸城主久野丹波守の家老で

畿内の茶人三傑の一人とうたわれた金森得水。

金森得水によって設計・建築された「玄甲舎」は

茶室・迎賓用を兼ねた数寄屋と、

家族が生活を営む居宅で構成された

数寄屋造りが特徴です。

貴重な歴史的建造物（遺産）

京都から一流の職人を呼びよせ、金森得水が自ら設計した「玄甲舎」。総建坪54・5坪（土蔵・物置は除く）で、内部は簡素美が追求されており、茶室と別邸に大きく二分して使われていました。

得水は、千利休から続く表千家茶道で免許皆伝を受け、しばしばここで茶会を催しました。士族をはじめ当代一流の各界名士を招き、交遊を深めたと伝えられています。

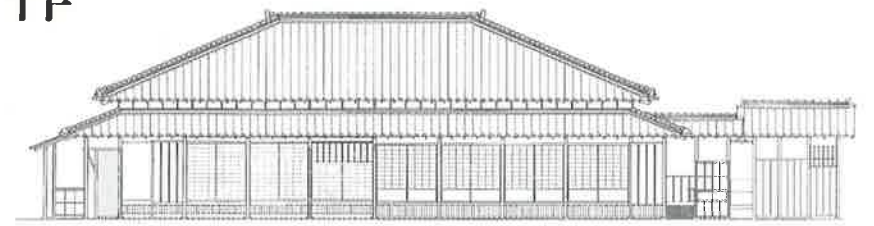
築後170余年、建材は建造当時のままで原形を留めており、当時の面影を見ることが出来ます。

全国で唯一 大工・庄五郎の遺作

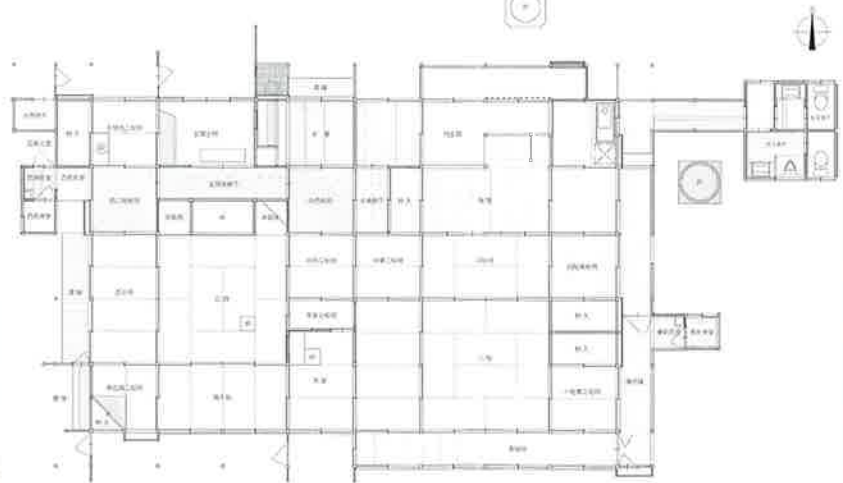
玄甲舎の築造に携わった職人の一人に、庄五郎という大工（棟梁）がいました。千利休が営んだ「残月亭」や「不審庵」など有名な茶室を再建した人物でしたが、再建した茶室は明治39年（1906

年）の火災で焼失し、庄五郎の作風を残す建物は無くなったかと思われていました。玄甲舎の八畳間の炉壇の蓋には、「大工庄五郎作 弘化四年丁未春日出来」と記されていることから、玄甲舎

が、全国で唯一現存する庄五郎の遺作かもしれません。数寄屋建築研究家の第一人者である工学博士中村昌生氏からも「そのような貴重な遺構が現存することは、当地だけではなく日本の唯一貴重な文化遺産と言わなければならぬし、玉城町のためだけではなく、日本の伝統文化に貢献すべく活用されなければならぬ」と評されています。



南立面図



平面図

玄甲舎の由来であり象徴である「亀」。得水は亀をこよなく愛しており、玄甲舎は亀の恰好に似せて作られたと言われています。得水ゆかりの品々には花押（自筆のサイン）が描かれています。これらには朱書きした亀の図形も用いられています。



炉壇の蓋の裏書（大工庄五郎）



玄甲舎（南面から見た全景）

こだわりの見える 広大な庭園

庭園は約250坪で、石灯籠や蹲踞（石や岩などで作った手水鉢）が備えられています。木々の間には大小の奇・怪石を取り混ぜた飛び石が置かれ、敷石が広く一面に散在しています。また、南面に広がる国東山系の山並みや東面の高い鷲嶺（袴腰山）を借景として楽しみましたと伝えられています。建物と同様、文化的価値の高い史跡といえるでしょう。



玄甲舎の庭園（修復前の景観）



玄甲舎の茶室



玄甲舎の座敷（八畳）床の間



「玄甲舎」の板額（正面玄関の奥に掛る）

金森 得水



(1786年~1865年)

つてどんな人？

江戸時代の終わり、田丸領の財政再建に貢献した、田丸城主久野丹波守の家老。藩政の実績もさることながら、さまざまな才能に恵まれ、文人としても広く世に知られた人物でした。

流派を超えて交流した茶人

表千家の最高位、免許皆伝を与えられた得水。その得水が、裏千家の茶人への贈り物とした竹製の花入れが残されています。裏千家の家祖の好みを真似て作っており、得水が茶道の流派を超えて交流していたことが窺えます。



花入

優れた鑑定眼の持ち主

得水は、陶器類の鑑定に定評があり、全国から依頼を受ける「目利き」でもありました。なかでも、全国の陶器を研究した「本朝陶器放證」は、大正時代に新論文が発表されるまで、日本で唯一の権威あるものとして重宝されました。



本朝陶器放證

一流の歌人

若くして国学を本居大平に学び、書道、和歌を有栖川宮熈仁親王の門下で会得、長じて文武両道を究めました。歌集は「那智百首」や「富士百首」、「詠物百首」、「習事十三巻」、「波奇多米草」があり、毎年表千家の利休忌には得水が詠んだ「草人木百首」という直筆の掛軸が掲げられます。



奥書院にある歌碑

水練の指導者

現在にも伝わっている日本の古式泳法「小池流泳法」の師範として、外城田川の水練場で田丸城家臣の子弟たちの指導にあたっていました。得水という号や、トレードマークとして使用していた亀を意匠化した花押は水泳に因るものといわれています。